

## 巻頭言

# 「ソーシャルインクルージョン」と 「障害(者)の定義」

NPO法人大阪障害者雇用支援ネットワーク顧問、広島国際大学大学院教授 關 宏之

1980～2000年代は、漠然と語られてきた「障害」について、医学的に、学術的に、社会的に、当事者という視点から、いかなる意味や根拠があるかが盛んに議論された、それなりに意味のある時代だった。

ICIDH(国際障害分類、1980)が、それまでの障害定義を要約し、講演などでも頻繁に引用されたりしたが、やがて、「疾病の帰結としての障害」の定義であり、社会構成員の多数(majority)からの逸脱(deviation)をもって健常者と障害者という相対的な分類を許容し、特殊な人(special・abnormal)・社会的弱者・救済・援護の対象者である「福祉サービスの受給者」を規定した医学モデルであり、「基底還元論」(より高く複雑な階層の現象をより低く単純な階層の法則で説明できる)であると、批判されるようになった。

一方では、「国連・障害者に関する世界行動計画(1982)」にみるように、「handicapとは、他の人々と平等に社会生活に参加する機会を喪失、または制約されることである」と述べ、社会的(ひと・こころ)・物理

的(もの)・社会的(しくみ)障壁(barrier)に原因があり、その是正措置(barrier free)が強調された。

このころ、私が遭遇した4つの出来事がある。

山田太一監督、鶴田浩二主演のテレビドラマ「男たちの旅路」のシリーズで、車椅子利用者と社会との関わりを捉えた「車輪の一步」では、障壁に満ちた、社会が克服すべき課題・心身機能の変調による、できないこと・当事者や保護者が抱えるステイグマ(汚辱感)に言及しながら、「迷惑をかけることを恐れるな」と説いた。当時、視覚障害の単独歩行や盲導犬育成事業に関わっていて、たいへん鼓舞された。

アメリカに行く機会があって、社会的排除(social exclusion)の典型は、障害者の利用が可能であることを強調したトイレや乗り物の表示だと聞かされた。バリアフリーが言われた頃で面食らったが、そもそも社会は、さまざまな人々によって構成されており、特定の人々を想定した特別なサービス提供を強調するのは、社会的包摂(social

inclusion)に反しているということだった。その3つめは、知能指数による知的障害者の特定に関することである。本来、知能指数は、社会構成員の連続を前提として正規分布するようにつくられた指標であり、知的障害の境界を規定する物差しではないということである。もし、そういう使い方をするのであれば、心身機能に変調がある人の存在もまた、社会構成員の必然である、というものだった。これは、生物としての人間を端的に表現する「スフィンクスの謎々」を連想させるもので、「健常者」であっても、幼子の時期から青年期の絶頂期を迎え、やがて老齢期を迎えるという変化(成長)を受け入れなければならない。

リハビリテーション・インターナショナル(RI)(1999)は、「2000年代には私たちは、障害を多様性のある人間が持つ普通の部分として受け入れなければならない」と表現して、個体差としてもまた個体内においてもさまざまな変調が存在するという事実を示している。「みんなちがってみんないい」のである。

心理・生理学的な視点から障害を定義したカナダモデルも、一世を風靡したが、2001年5月には、第54回WHO総会で国際生活機能分類(ICF;International Classification of Functioning, Disability and Health)が規定され、「ひとの機能(human functionings)」における活動性や社会生活の実態を表す新たな定義が採択され、定義に関する論戦も下火になった。

その4つめは、1993年から1997年までの

最晩年に、「全日本手をつなぐ育成会」の理事長であった春山廣輝先生のことである。当時、「全日本精神薄弱者育成会」と称した会の名称を、障害名を入れない「手をつなぐ育成会」にすること、用語としての「精神薄弱」を改め「知的障害」とすること、「私は私のため、黙って石になった。私は私のため、黙らず火になる」という知的障害のある人の発言をもって、毎年「就労支援セミナー」を全国8か所で開催して、「働くことの権利」を唱え、「施設建設への予算配分を中止して、地域生活を実現するためのグループ・ホームの設置予算を集中すること」と宣言された。「彼らを黙らせてはいけぬ。彼らにもっと怒ってもらいたい。もっと、私たちに教えてもらいたい」と発言されて、彼らの発言を擁護された。それが、ピープルファーストやセルフアドボカシーを掲げる支援者や当事者運動を鼓舞するが、反面、施設経営者、支援者、保護者たちからの反発を招いた。先生の遺稿「彼らの願いを原点に－もう施設はいらない!？」には、「能力と意欲」という都合によって分類され、いつまでたっても対象者・クライアントでしかない彼らは、実は、生活主体者であり、一人の人間であることが強調されている。

人は定義を生きる訳ではないが、ほんの20数年前の緊張感が薄れて、「障害者」という用語がさほどの躊躇もなく氾濫している。やはり、用語の使用は慎重であり、かつ敏感でありたい。